

本当の勉強

能力開発ニュース 59号（2003年2月）より

研究開発部 矢口みどり

受験シーズンである。

この時期になると、数年前にコーヒーショップでふと耳にした会話を思い出す。

私は待ち合わせの時間までの1時間をつぶすためにそこにいた。しばらくして隣の席に三人連れの客が座った。20代前半くらいの若者二人と17、8歳の少女だった。若者の一人は、その頃はまだ目をひく茶髪のつんつん尖った頭をしていた。三人はあたりを気にする風もなく、親しげに会話を展開していき、私は聞くともなく彼らの話を聞いていた。

三人はいとこ同士らしく、少女がその年の受験に失敗したその残念会と、来年再び志望校への挑戦を決めたその激励会のようなようであった。やがて、W大の大学院に行っているらしい茶髪の若者が少女に受験勉強のコツをアドバイスしはじめた。私が思わず耳をそばだててしまったその中の一言。

「受験勉強っていうのは本当の勉強じゃないからね。」それに続けて彼は言った。

「でもやりたいことをするためには、通り抜けなくちゃいけないんだよね。だから、できるだけ面白くやらなくちゃね。」

それから彼は、英単語の学習をゲーム的に進めていく方法や、歴史を手っ取り早く頭にたたき込む方法などを、もう一人の若者とともに従妹に説明し続けたのである。受験勉強というのは、つづめて言えば教科書に書かれたたくさんの知識を覚えるという勉強である。そしてそれは、今の学校教育の主流である。彼は、そうした勉強は本当の勉強ではないということを、大学、大学院での勉強を通じて知ったのである。

彼と同じような思いを抱きつつ、それを押し殺して勉強している若者は多い。「何のために勉強するのか。」「この勉強にどういう意味があるのか。」 私たち大人には、バラバラになった知識を注入するのではなく、これは本当の勉強だという実感を持てる学習を、若者たち子どもたちに提供する責任がある。自分の夢に向かって、また世の中の課題に向かって、その実現や解決のために情報を収集したり、分析したり、観察したりする力、仲間と話し合い共同する力、実行する力、今そうした力をつけているんだと実感できるような学習を提供する責任が。そしてそれは、目の前の課題に対して、そうした力を働かせる場を作る以外にないのではないか。そうした思いを改めて強く感じさせられた。（了）